

位置づけている点に特徴を認めることができる。

次に組織面では、この運動はいわゆるタリイカという形ではなく、コミュニティ団体という形を取って展開している。これらの団体の多くは直接的には「宗教実践」を目的とする組織ではなく、一義的には地域のムスリムの必要を満たすような様々なサービスを提供するために創られた団体である点で、既存のタリイカとは異なる性格を持つものである。

本発表では、こうしたスーフィー系コミュニティ団体の事例として、二〇〇九年にカリフォルニア州フリーモント市に創設されたコミュニティ・センターであるタリイフ・コレクティブに焦点を当てて考察を行う。既存のタリイカと同様に、この団体も神秘主義に関心のあるムスリムや、「主流派」のエスニック・コミュニティに馴染めない改宗者などを惹きつけているが、団体が提供する若者向けのプログラムには、こうした若者たちがイスラームに関する基礎的な知識やコミュニティ活動のためのノウハウを学んだうえで、「主流派」のムスリム社会に「復帰」できるようにするという志向が見られる。また、この団体自体には、礼拝やズイクルを行うための恒常的な場が用意されておらず、いわばモスクや教団のような宗教施設としての機能を持たないように設計されていることも特徴的である。このように、タリイフ・コレクティブはあえて「スーフィー・コミュニティ」という形態を取らず、むしろ既存のコミュニティを「補完する場」としての役割に徹することで、スーフィズムと「主流派」ムスリム社会とを架橋し、後者におけるスーフィズムの復権に取り組んでいると解釈することができる。

災害を生きる——グアテマラにおける宗教と文化——

大村 哲夫

中米に位置するグアテマラ共和国には、マヤ文明の末裔であるマヤ系先住民が彼らの文化を維持しつつ多数居住している。「常春の国」と呼ばれ、温暖で風光明媚な「楽園」は、スペインによる征服と苛酷な植民地支配、軍事政権による弾圧と虐殺・貧困・疫病・火山噴火・地震・水害・ハリケーンなど様々な人為災害、自然災害に相次いでみまわれる災害の国でもある。二〇一八年には、世界遺産アンティグアに近いフエゴ火山が噴火し、先住民の村が甚大な被害を受けた。

筆者は、このような状況の下、先住民が何を支えにして生きているのかについて明らかにしたいと考え、二〇一九年一月および四月にフィールド・ワークを行い、一九歳から七六歳の先住民男女二七名を対象に半構造化面接を実施した。その結果、以下のことが分かった。

彼らが最も辛いと考えた災害は、第一に内戦、次いで地震、火山の噴火、欠乏、強盗などである。内戦は一九六〇年から九六年まで軍事政権と反政府組織との間に続き、先住民は反政府寄りとされ虐殺の対象となった。今回の聞き取りからも、「無実の家族がこの家で軍によって殺された」、「友人二人が殺され、その母親も殺された」など生々しい体験を語り涙するなど休戦後二三年経つ今も心の傷となっていることが窺われた。地震は内戦中の一九七二年に発生したもので、日干煉瓦で作られていた先住民の住居が崩壊し多くの犠牲者が出た。軍が出動し直ちに大きな穴が掘られ死体が埋められたが、中にはまだ息の

ある被災者もあつたという。屍肉を狙つたコヨーテの啼き声を繰り返し真似る語り手が印象に残る。火山国グアテマラは潰滅的な被害をたびたび受けているが、直近の二〇一八年フエゴ火山噴火が挙げられた。被災者は先住民だけだという。火砕流の危険がある場所に先住民の「村」が作られたのは、被災者の過失ではない。内戦によって焼かれた村の生き残りを集めて入植させられたのだと語る。ゴルフ場などに関わつてきた白人富裕層は難を逃れ、先住民の場合死者数すら確定しないという。語りの中で政府への強い不信と諦めが感じられた。

このような人災・自然災害に遭遇した時、生きる支えとなつたものは何であろうか？ 先ず信仰が挙がり、仕事（織物・刺繍など）、趣味、家族と続く。話者の宗教はカトリックが四六%、福音派二九%、マヤ宗教一八%となり、福音派の擡頭とマヤ宗教の復活が目立つ。仕事の織物は、マヤ女性が自分や家族のために手で織り縫うもので、普段着であつても手の込んだ美しいものである。織る作業に含まれる繰返しと意識集中による心理的效果もあるだろう。織られた布は民族衣裳に仕立てられるが、男性の常用者は九%であるのに比べ、女性は八一%が常用する。衣裳はマヤ文化そのものであり誇りであるという。男性の着用の低さについてある男性話者は、「軍にゲリラと見なされ殺される危険があつた。先住民であることを隠して、ラデーノ（白人化した先住民）として就職するため」と説明している。

グアテマラ先住民は、天災と人災に翻弄されてきたものの、なお民族の誇りと共に生きている。特に女性の場合、信仰を守

り、家族のために織り、自ら民族衣裳を着用し、家族の食事を作ると具体的な生活自体がマヤとして生きるための支えとなつており、そのことに生きる意味を見出している。それに対して男性は、マヤ文化を抽象的に捉えており、現実的な事情によつてマヤを生きたことが難しくなっている。現金収入となる仕事がなく、国境を越えて北米を目指さざるを得ない現実、男性からマヤの誇りを奪いレジリエンスを低めているように映る。近年、プリントされたティシャツが出回るようになり、手間と費用が掛かる手織りをしない女性も見られるようになった。トウモロコシのトルテイジャを毎食焼くことも無くなるかもしれない。その時、何が彼らを支えるのだろうか？

インドにおける少子高齢社会パールシー・コミュニティの現状

香月 法子

二〇一六年に公表されたパールシーの二〇一一年インド人口調査結果は五万七千二百六十四人であつた。この結果は彼らに、予想していたよりも倍近い減少傾向であることを突きつけた。減少の要因は、主にパールシー女性の合計特殊出生率〇・九四人が示すように、少子化が進んでいること、全体の三一%が高齢者であると言われていること、晩婚傾向が男女ともに見られること、そして外婚率が全体で四割、男性だけで見れば五割に達していることが考えられている。ムンバイ以外の居住区でのパールシー人口減少は、寺院やゾロアスター教で最も注目される慣習である鳥葬維持の困難な状況となつて、すでに目に見えて現れている。